

見えていたが、今日は、何も見えないぞ。」

与右衛門さんも、海のように変わった田んぼを見るのは、初めてです。与右衛門「おじいさん、田んぼのお米は、どうなるんですか。」

吉長「今、雨が止んでくれればよいが、このまま続くと、米は一粒



も取れなくなるだろう。田んぼを作っているみんなのことが心配だ。様子を見に行こう。」

おじいさんと与右衛門さんは、雨の激しく降る中を近くの農家の方へ歩いていきました。

③ 吉長「弥平は、いるかな。」

弥平さんの家の戸を開けて、声をかけました。

弥平「あつ、これはお奉行様。どうしてここへ。」

蓑合羽は着ていても、ずぶぬれ姿のお奉行と、与右衛門さんが立っているのを見て弥平さんは、びっくりしました。

吉長「弥平、田んぼが大変なことになつてゐるな。」

弥平「はい、降り続く長雨で、田ん

ぼが水に沈んでしまいました。わしら農民は何もできず、このままでは、食べる米もありませんし、来年の春に播く種子も取れませぬ。お奉行様、何とか助けてください。」



話をするうちに弥平さんの目からは、涙があふれてきました。次に行つた甚平さんの家でも、ぼろぼろ涙

を流しながら言います。

甚平「このままでは、わしらは、もう飢え死にするか、ここから逃げ

だすしか、方法がありません。」お奉行は、続いて太吉さんの家にも行つてみました。

太吉「もう稲穂が腐つてきているんです。これでは一粒の米もとれないよ。わしらは、みんな、生きていけません。どうすればよいのでしょうか。」

あつちの家、こつちの家と、どこへ行つてもみんな同じように、泣きながら訴えました。

雨の中を集まってきた多くの農民

たちは、不安と悲しさで、胸がいっぱいになつていました。

松吉さんが言いました。松吉「わしらは、このままでは、飢え死にするのを待つだけです。『もう風早では暮らせないから、よそへ行こう。』と、人からも、言われているんです。」

梅助さんや、竹吉さんも言いま

④ 梅助さんや、竹吉さんも言いま

した。梅助「『ここにいたら、飢え死にだぞ』と、言われたんです。」

竹吉「わしも『他に、もっと暮らしやすい、よい所がある』と、ろう

にん（仕える主人のいない侍）の須卜（すぶく）さんから言われま

した。」農民たちの訴えを聞いて、お奉行は考え込みました。

吉長「あのならず者の須卜が、みんなに言いふらしているのだな。これは大変なことになる。農民たちがここを出てしまつたら田畑を守るものがいなくなり、土地が荒れ

てしまう。それだけでは何としても止めなければいけない。」

お奉行は、みんなに言

吉長「よい

か、みん

な。須卜がなんと言おうと、そんな口車に乗つてはならんぞ。今、どこへにげて行つても、暮らしは変わらぬ。今年はこの悪い年になつてしまつたが、お前たちが食べる米は、よそから買つても用意をする。飢え死にはさせないぞ。わしがお前たちを守り、来年も米が作れるように約束する。だから、風早から出て行くことなど、考えるな。それよりも、今年の米が少しでも取れるように、これからみんな手を尽くすのだ。だから、今日は家へ帰れ。」

お奉行の言葉に、農民たちは、少し、安心したようにならずいて帰つて行きました。

吉長「与右衛門、聞いたか。今、農民たちがどんなに苦しい思いをしているか、しつかり覚えておきなさい。その苦しみを減らし、助けるのが奉行の仕事なのだ。」

お奉行は、与右衛門さんに言いま

した。吉長「与右衛門、わしは、これから須卜に会つて大事な話をしなければならぬ。お前は、ここから屋敷へ帰つて、奉行所の者たちにそのことを伝えなさい。」

道がとても悪いから、十分に、

気をつけて帰るように。」

与右衛門「はい、では先に帰つて、

そのように伝えます。」

